

長沙走馬楼呉簡にみえる「貸米」と「種糧」

——孫呉政権初期における穀物貸与——

谷 口 建 速

はじめに

一九九六年、湖南省長沙市走馬楼で発掘された古井戸中より、総数約一四万点に及ぶ三国呉代の簡牘（以下、走馬楼呉簡）が出土した。⁽¹⁾この簡牘群は、地方行政関係（当時の長沙郡・臨湘侯国）の簿籍・文書を主たる内容とし、特に、数多く含まれている各種の学籍や倉庫の帳簿などの簿籍群は、それらを総合的に分析することで、当時の地方行政の具体的な状況をうかがうことのできる資料である。筆者はこれまでに、走馬楼呉簡中の穀倉に関連する簿籍簡牘を分析し、孫呉政権における地方財政システムの解明を試みてきた。⁽²⁾また並行して、地方穀倉の具体的な収支項目に

についても検討を進めてきた（表一）⁽³⁾。その中で、財政収支上における穀物の大きな流れのひとつである、官倉から民衆への穀物貸与については、言及はしてきたものの具体的な検討を行えていない。そこで本稿では、穀物貸与に関する幾つかの記録・簿を分析し、孫呉政権における民衆への穀物貸与について具体的事実を明らかにしたい。

また唐代以前においては、民衆への穀物貸与に関する記事は文献史料中に散見するものの、多くは天災・飢饉発生時の緊急措置としてのものであり、実際の運営など具体的な状況をうかがえる資料は数少ない。⁽⁴⁾その意味で、呉簡中に穀物貸与に関する記録がまとまって含まれていることは大きな意義を有しているといえよう。呉簡中の穀物貸与について検討するとともに、その歴史的位置づけについても考

えを進めたい。

表一 走馬樓呉簡中にみえる穀物収入⁽⁵⁾

I 新規の収入	
i 正戸民の田に課された賦税	…「税米」・「租米」 ・各種「限米」
ii 屯田に課された賦税	…「屯田限米」
iii 地租以外の穀物収入(官有物賣却の代価としての収入など)	
II 返却や補填としての収入	
i 貸与の返還	…各種「民還貸食米」
ii 喪失分の補填	…「折咸(減)米」 ⁽⁶⁾

一、「貸食」米の返還

―穀物納入記録と「貸食」米簿

走馬樓呉簡中に最も多くみえる記録の一つとして、次のような穀物の納入記録がある。

【資料①】穀物納入記録と簿の構成要素

- 1 入平郷嘉禾二年租米六斛胄畢一嘉禾二年十月廿八日東丘番有關邸閣董基付三州倉吏鄭黑 1-3221
- 2 入都郷嘉禾二年税米一斛二斗一嘉禾三年正月十二日白石丘大男谷黑關邸閣李嵩付州中倉吏黃諱潘慮 2-359

- 3 ●右諸郷入租米五十八斛六斗 1-2874
- 4 ●右平郷入税米廿七斛二斗 1-3032
- 5 ●集凡三州倉起九月一日訖卅日受元二三年襍米合七十九斛八升 3-3737
- 6 倉吏鄭黑謹列故倉吏谷□所度連年襍米簿 1-3169

【資料①】は、穀物の納入記録(1・2)及び当該記録を列ねた穀物簿の構成要素(3・4・5は集計記録、6は表題簡)である。本記録を含め、既公表の竹簡簿は、編綴が失われ散乱した状態で出土しており、復原は困難であるため、本稿では各構成要素を数点ずつ例示する。納入記録の書式は次のようになる。⁽⁷⁾

入+某郷+年号+穀物の種類+数額+儻(胄・就)畢
+一+年月日+某丘+身分+納入者名+關+「邸閣」
姓名(名は署名)+付+某倉+倉吏姓名(名は署名)
+受

1を書き下し、意味を取ると次のようになる。

平郷の嘉禾二年の租米六斛を入る。胄畢。嘉禾二年十月廿八日、東丘の番有、邸閣董基に關して三州倉吏鄭黑に付す。

平郷に關わる嘉禾二年(二三三)分の「租米」六斛の納入が完了した。嘉禾二年十月二十八日に東丘の番有

が納入した。「邸閣」の董基が納入の報告を受け、「三州倉」吏の鄭黒が受領した。

簡中に大書される「一」（「同文」を意味する符号）や納入業務に関わる吏（邸閣・倉吏）の名が別筆（署名）であることから、本記録は穀物受納の際に作成された証明書（「前」として分割保存された）としての機能を有することが分かる。これら一簡一簡は納入・受納の証明書として作成されるが、一定期間を経て3・4などによって集計され、さらに5などによって簿としてまとめられた⁽⁸⁾。

同類の記録は、断簡を含めると二〇〇〇例以上を確認できる。そのうち、民に対する穀物貸与の存在を示すものとして次のような記録が確認できる⁽⁹⁾。

【資料②】「貸食」米の納入記録と簿の構成要素

- 1 入平郷嘉禾二年還所貸食黄龍元年私學限米四斛一嘉困二年十二月四日柚丘謝六關邸閣匱 1-5573
- 2 入樂郷嘉禾二年還所貸食黄龍三年税米四斛一嘉禾二年十二月廿一日□丘鄭□關邸閣董基 1-5683
- 3 入廣成郷嘉禾二年還所貸食黄龍三年税米九斛五斗就畢一嘉禾二年十一月七日彈漚丘廖□關邸閣董基 1-6008
- 4 入平郷所貸三年税國還米九斛三斗就畢一嘉禾元年十月廿九日平陽丘呂奚付三州倉吏谷漢受 3-2683
- 5 入小國國郷三年貸食米四斗匱 一嘉禾二年十月廿六日

長沙走馬樓吳簡にみえる「貸米」と「種粮」

□□付三州倉吏匱 中 3-3769

6 右樂郷入民所貸三年租米一斛五斗 1-5161

7 右小武陵郷入三年貸食米三斛 匱 3-3630

8 ●集凡三州倉起九月一日訖卅日受嘉禾二年民所貸二年 1-5288

9 倉吏鄭黒謹列故倉吏谷漢所度民還貸食連年糶米匱 1-6522

【資料②】の諸簡は、簡の形態、書式が【資料①】に挙げた諸簡と同一であり、記録ないし簿としての性格も同じと考えられるが、納入した穀物の性格が異なっている。例えば【資料②】1には「嘉禾二年還所貸食黄龍元年私學限米四斛」とあり、この部分の意味は「（納入した穀物は）嘉禾二年分の「貸食」として貸与されていた「黄龍元年分の私學限米」四斛を返還したもの」となる。すなわち、かつて官倉より貸与された穀物を吏民が返還・納入したことに付いての記録である。本記録では、貸し出される以前に穀倉で收藏されていた段階での名目（「黄龍元年（二二九）分の私學限米」（1）・「黄龍三年（二三二）分の税米」（2・3）など）が明記されていることに注目される。また「貸食」とあることから、ここに記録される穀物は食糧としての目的で貸与されたものであったことが分かる。穀物の呼

び方としては、右に挙げたように「某年還所貸食某年某米」(1・2・3)の他、「所貸某年某米」(4)・「某年貸食米」(5)など幾つかの情報を省略した表現もあるが、いずれも同様の形で返還された穀物の受納記録であろう。

【資料①】・【資料②】で注目すべきは、それぞれの簿の表題簡である。【資料①】6・【資料②】9は、当該記録の表題簡と考えられる二つの例である。簿の内容はともに「倉吏鄭黒が作成した故倉吏谷漢の『度せし所の』雑米簿」(前者は図版により釈文を読みかえた。また、その未読字も「漢」であったと考えられる)であるが、前者は「連年雑米」を対象とした簿、後者は「民還貸食連年雑米」のみを対象としたものである。両者の比較から、前者は「雑米」すなわち「税米」・「租米」・「限米」など様々な名目による穀物受納に関する簿である一方、後者は「民還貸食」としての穀物受納に限定された簿ということになる。【貸食】についても「雑米」とあるのは、前述した貸出以前の名目(1の「黄龍三年分の私学限米」など)と関連すると考えられる。したがって、「貸食」米は他の「雑米」とは別個の簿としてまとめられたことが分かる。

以上に確認した諸記録・簿は、吏民が穀物を返還・納入した際の記録であり、官倉が吏民へ貸与した段階での情報ではないが、約一二〇点におよぶ諸記録を総合することに

より、「貸食」米貸与についていくつかの基礎的な事実が明らかとなる。以下、事項ごとに検討したい。^⑩

(1) 貸与の対象

記録中では多くの場合「民還貸食」・「民所貸」などと表現されるが、1-5314簡における納入者の身分の部分に「□吏」とあるなど、厳密には吏なども含まれる。すなわち、「貸食」は所謂一般民衆である「吏民」を対象としていたことが分かる。また、集計記録の一つに「●右平郷入三年貧民貸食米十一斛七斗」(3-2727)とあるように、特に官側から「貧民」と判断された人々に対して貸与されたものである。「貸食」が「貧民」を対象としていたことについては、上記の記録とは別種の簿に「其冊七斛四斗爲黄龍三年貧民所貸米」(1-9549)などあることから確認できる。

(2) 貸与額 (厳密には「返還額」)

いづれの記録においても、納入額は数斛〜十斛未満と少ない。^⑪また、郷ごとの集計記録も多くが数斛〜十斛程度であり、一見、一郷当たりの貸与件数は多くないように思われるが、中には「●右平郷入所貸米一千七十五斛四斗三升」(1-4426)など、かなり膨大な額が記されるものもある。

この例について、仮に一人(一戸)当たり平均三〇五斛程度を貸与したとすると、約二〇〇〇五〇〇人(戸)に貸与を行なったことになる。高村武幸氏によると、走馬楼呉簡における郷の戸口数は、二〇〇戸・一〇〇〇人前後であり、これと比較すると、郷に属する大部分の人々に「貸食」米が貸与されていた計算になる。¹²⁾以上のことから、官側は多くの吏民に少額ずつを貸与した可能性が生じる。

(3) 貸与の手続き

本記録は「貸食」米返還時の記録であり、貸与の際の具体的手続きはうかがえないが、賦税等の納入記録と同様、郷を単位にまとめられていることから、貸与の際にも郷が介在していたことが推測される。鳳凰山漢簡「鄭里廩簿」によると、貸与業務における里の関わりが確認できる。呉簡における倉庫関連簿籍はみな郷以上を単位にまとめられているため、里における状況は不明であるが、穀物貸与に地方行政機構の基層部分が関わっていたという点では前の時代の状況と共通する。

(4) 返還の時期

穀物の年度および納入年月日によると、貸与される穀物は前年度以前に収蔵されたものであり、それらは基本的に

長沙走馬楼呉簡にみえる「貸米」と「種糧」

貸与された年度中に返還されたことが分かる。例えば【資料②】2の場合は、嘉禾二年における「貸食」として黄龍三年分の「税米」(として収蔵されていた米)が貸与され、嘉禾二年十二月二十一日に返還されたことになる。また、返還・納入の時期の月ごとの分布をまとめると、次のようになる。

表二 「貸食」米納入記録の月分布

一月…〇例	二月…二例	三月…一例	四月…二例
五月…一例	六月…〇例	七月…〇例	八月…〇例
九月…五例	一〇月…九例	十一月…九例	十二月…八例

この他、簿の集計記録である「集凡」簡に二月(1-5664)・九月(1-5288)【資料②】8)・十一月(1-5217)のものが各一点ずつ確認できる。表二によると、賦税の納入時期でもある九月・十二月に納入が集中する一方、六・八月の例が見えないという傾向を見出せる。このことから、「貸食」は食糧の不足しがちな夏期以降に貸与され、賦税としての穀物と同時期に返還・納入されるという状況が想定できよう。ただし「集凡」簡からうかがえるように、各記録は本来、月ごとに集計した帳簿としてまとまっていたものである

り、たまたまある時期の記録が集中して出土し、他の時期のものは見つからないという可能性も否めない。今後の資料の増加を俟ち、検討を進めたい。

(5) 利息について

最後に、利息の問題について確認しておきたい。

□ 五年貸食息米一斛六斗一嘉禾六年二月十六日不丘李

完關主記梅

146

本簡は上下ともに断簡ではあるが、残存部分の書式が納入記録と同じである。また穀物の名目部分に「貸食息米」とあることから、「貸食」米に対する利息としての穀物納入に関する記録であることが分かる。⁽¹³⁾すなわち、本簡より「貸食」米の貸与には利息が生じたことが判明する。ただし、穀物に関わる「息」の例はこの一点のみであり、利率など具体的な部分については現段階では不明である。

以上、本節では「貸食」米すなわち食糧としての穀物貸与に関する記録を分析し、諸状況を明らかにした。次節ではタネモミとしての穀物貸与について検討する。

二、「種粳」の貸与

唐代では、春にタネモミとして穀物を貸し付け、秋に利

息を付けて返却させる「出挙」が行われたことが知られる。呉簡中にも、タネモミとしての穀物出給に関する次のような竹簡が確認できる。

【資料③】「種粳」に関する「君教」簡

承出給民種粳掾丞 如 曹期會掾丞 録事

|| 掾谷水校

1 君教

嘉禾三年五月十三日

|| 付三州倉領雜米起

主簿

嘉禾元年七月一日訖

|| 九月卅日一時簿

2-257

2 君教

承出給民種粳掾丞 潘 如曹期會掾丞

|| 録事掾谷校

||

3 君教

已校 承出給民種粳掾丞潘如曹 2-6921 + 2-6871

3 君教

已校 承出給民種粳掾丞潘如曹 3-2056

これらの簡は、幅が他の竹簡の2〜3倍あるなど形状が特異である。⁽¹⁵⁾各々文字に脱入があるため、上記三例の記述を総合して全体像を復元すると、次のようになる。

君教 承出給民種粳 掾丞潘 如 曹期會掾丞 録

事掾谷水校

某年某月某日付三州倉領雜米起某年某月某日訖

某月某日一時簿

(別筆で主簿などのチェックが入る)

簡の性格については、上段中央に「君教」とあり、「君」の教書の形を取っていることが分かる。「教」は上級官府によって出された下行文書の一種であり、「君」は、3620簡に冒頭部が残存するのみではあるが、「府君教」とあることから「府君」＝郡太守のことと考えられる。⁽¹⁶⁾また、下段の二行目から三行目にかけての記述からすると、簿(民に対する「種粳」の出給に関する簿か)の表題簡としての機能も有していたことが分かるが、現段階では本簡の後に列ねられる他の構成要素は確認できない。

「君」の指示の内容については、「丞」に対して、民のために「種粳」を「出給」すべき旨が記されている。すなわち、「種粳」の指示が郡太守により出されていることになる。「丞出給民種粳」以下の部分については、官名・人名が列記されるようであるが、簡によっては人名に相当する部分が空欄になっており、厳密な内容は確定し難い。三者の記載を総合するに、「掾の丞潘・如曹」・「期會掾の丞某」・「録事掾の谷水」の四名が校閲したという意になろうか。⁽¹⁷⁾なお、【資料③】1の中段左側には別筆で主簿のチェックが入り、2・3にも別筆で「已校」と記されるなど、この簿が既に校閲を経っていたことも分かる。

「種粳」については、【資料③】に挙げた簡の他、次のよ

長沙走馬楼呉簡にみえる「貸米」と「種粳」

うな記録が確認できる。

【資料④】「種粳」米に関する記録

- 1 其四斛閹囹嘉禾二年匱民佃種困粮 1-3109
 - 2 其二百二斛一斗給貸嘉禾二年□□佃秣種粮收還囹□ 2-718
 - 3 其九百四斛七斗給貸黄龍三年貧民佃種粳已囹 2-4481
 - 4 其十六斛六斗司馬黄升還黄龍元年種粮米 1-2085
 - 5 入司馬黄升黄龍元年種粮米十六斛六斗 1-3183
- 1・2・3に「佃種(米)粳」・「佃秣種粳」とあることから、「種粳」は食糧ではなく播種用のタネモミとしての「米」を意味することが明らかとなる。⁽¹⁸⁾このように、生産に関わる貸与である「種粳」と消費に関わる「貸食」が呉簡中に併存して記録されていることは、両者が明確に別個の貸与業務として実行されていたことを示している。【資料③】の各簡によると、民に対する「種粳」には「民に出給す」とあることから、貸与ではなく「支給」である可能性も生ずるが、【資料④】1・2・3では「給」字とともに「貸」字も記されていることから、やはり返還を必要とする貸与であったことが判明する。また3によると、「貸食」と同様、「貧民」に対して行われた政策であったこと

が分かる。

4・5の「司馬黄升」は、他の記録中に「屯田司馬黄升(松)」⁽¹⁹⁾としてみえることから、両簡は屯田司馬の黄升が屯田に関わる「種粳」米を穀倉へ返還したことについての記録と考えられる。これらの例から、屯田用の「種粳」もまた官倉から貸出されるものであり、かつ後に返還されるべきものであったことが分かる。

上述したように、【資料③】に提示した表題簡に続く記録は現在のところ確定できず、「種粳」米貸与の具体的な状況は不明であるが、その指示は郡太守から出されていたことが明らかとなった。また、一件一件の貸与の状況は分からないが、【資料④】2・3に記録される額によると、広範に行われていた可能性がある。

三、「禾」の貸与 — 「出禾」簿と「取禾」簿

以上、二節にわたり検討した資料の他、穀物の貸出については、次のような記録がある。

【資料⑤】「貸」禾の記録と「取」禾の記録

- | | | | | | | |
|---|------------|---|---|---|---|------|
| 1 | 大男烝□一夫貸一斛 | □ | □ | □ | □ | 3-1 |
| 2 | 大男謝立一夫取禾一斛 | 居 | 在 | | | 3-7 |
| 3 | 大男鄭觀一夫貸一斛 | □ | | | | 3-21 |

- | | | | | | | | |
|---|----------|------|---|---|---|---|--------|
| 4 | □□取禾一斛五斗 | 居 | 在 | 木 | 氏 | 丘 | 3-457 |
| 5 | 大男李息一夫 | 取禾二斛 | 居 | 在 | 劉 | □ | 3-6296 |
| | 里 | 丘 | | | | | |
| 6 | 呉昌烝金一夫 | 取禾一斛 | 居 | 在 | 平 | □ | 3-6301 |
| | □安 | □丘 | | | | | |

これらの簡には、戸主の身分・姓名と戸中の「夫」数、官が貸与ないし受取った「禾」の額、居住する丘について記録されている。冒頭の人名は、簡文中に「夫」の人数が記録されていることから、戸主と判断した。本記録における「夫」は、鳳凰山漢簡「鄭里廩簿」中の「能田」と同様、「農耕に従事し得る成人男性」を意味すると考えられる。同類の簡は、数点を除きほぼ全てが断簡であるが、既公表の竹簡中に一八六点見える。当該記録の書式は次のようになる。

- ①身分+姓名+「夫」の人数+貸+禾の数額+居在+丘名
- ②身分+姓名+「夫」の人数+取+禾の数額+居在+丘名
- ①は禾を貸与したことに関する記録(1・3)、②は官が禾を受取った、すなわち返却された禾の受取に関する記

録(2・4・5・6)であろう。「貸禾」の記録は二九点、「取禾」は五七点を確認できる。その他は、当該部分が断簡ないし文字が磨滅している。次に、本記録を本文とする簿の構成要素を提示する。

【資料⑤】

- | | | |
|----|-------------------------|--------|
| 7 | □□廣成平模桑郷所出禾給貸民草枚數□□ | 3-57 |
| 8 | ●右平郷□□□□丘三人取禾三斛 園 在 □ 丘 | 1-941 |
| 9 | ●右平郷□□□□丘五人取禾三斛 | 1-995 |
| 10 | □淦(?)丘民五人取禾五□ | 2-9033 |
| 11 | ●園平郷巾竹丘民七人 取禾七斛 | 3-62 |

7は断簡であるが、記載内容から簿の表題簡と考えられる。本簡より、当該簿が郷を単位に作成された簿であると判断できる。すなわち、「禾」の貸与・返還は郷を介して実行されたことが判明する。ただし、この簿には少なくとも広成郷・平郷・模郷・桑郷の四郷分の記録が含まれる。「所出禾給貸民」という表現からは、【資料⑤】に挙げた各簡は、「禾」を搬出して民に「給貸」したことに関する記録であることが分かる。⁽²⁰⁾

8・11は、集計記録である。断絶や文字の磨滅により全文を確認できるものは無いが、冒頭の記述を総合すると、

長沙走馬樓兵簡にみえる「貸米」と「種粮」

郷の下の行政単位である「丘」を単位として集計していたことが分かる。これは、本文に相当する記録(1・6)の最後の部分「居在某丘」の「丘」と関連するのであろう。ただし、既公表の竹簡から対応する当該記録を調べると、10の「淦丘」は、ともに断簡ではあるが簡3-442と簡3-1125に見えるものの、11の「巾竹丘」のものは確認できない。

また、8・11はみな「取」禾に限定された集計記録であることから、「貸」禾と「取」禾の記録は別々に集計されたことが明らかであるが、その簡番号の分布を確認すると、『竹簡参』の1・500前後には「貸」禾・「取」禾の記録がともに見られるものの、『竹簡壹』・『竹簡貳』所収の簡はみな「取」禾の記録である。したがって、「貸」禾の簿とお、現在確認できる集計記録は、「取」禾に関するもののみである。⁽²¹⁾

ここで、関連する記録のデータに基づき、「取」禾・「貸」禾についての基礎的な事実を確認したい。

(1) 貸与の対象

各簡の情報を総合すると、次のようになる。

表三 「貸」禾・「取」禾記録中の戸主身分

大男五〇例	☑男二例	大女二例	新吏二例
県吏一例	☑吏一例	郡☐師一例	私学一例
呉昌一例	呉倉二例	(他は当該部分が断簡ないし磨滅)	

一般農民と目される大男(Ⅱ成年男子)が六三例中五〇例と多くを占め、各二例の「☑男」(恐らく「大男」)・「大女」(女性の戸主)を合わせると全体の八割以上となる。その一方、僅かながら新吏・県吏などを戸主とする戸も確認できる。従って、「貸食」と同様に「吏民」を対象とした貸与であると考えられる。また、【資料⑤】5の「劉里丘」に居住する「大男李息」について、「劉里丘男子李息、佃田廿一町、凡五十三畝……(後略)」(4-466)とあるなど、本記録における穀物貸与者のうち一四名が「吏民田家⁽²²⁾」の記録中にもみえる。このことは、「貸」禾が一般民衆を対象としたことを傍証しよう。「郡☐師」は師佐籍中に見える手工業者の一つ、「私学」は遊学者であり、ともに税役面で優遇を受けた。「呉昌」・「呉倉」については、現段階では不明である。

(2) 貸与額

表四 「貸」禾・「取」禾の額

一斛…七五例	一斛五斗…二例
二斛…五例	七斗…一例

大部分の事例は、一戸当たり一斛の貸与であったことを示している。鳳凰山漢簡「鄭里廩簿」では、各戸人(戸主)は一畝ごとに一斗と、田の面積に応じて穀物を貸与されており、両者の穀物貸与はその方法が大きく異なっていたことが分かる。また、幾つかの記録では、戸内に複数人の「夫」が居たことが確認されるが(「二夫」一・「三夫」一例)、簡36827の一例(「二夫の戸に二斛を貸与」)を除きみな一斛を貸与されており、「夫」の人数と貸与額とは対応していなかったことが分かる。戸の総口数は記録されていないものの、このように「夫」の人数の増減に貸与額が対応していないことから、この貸与が食料目的ではなく、生産目的であった可能性が想起される。8-11に挙げた集計記録においても人数(戸主Ⅱ戸を一人と数えているようである)と斛数が一致することから、一戸一斛が基本的な貸与額であったといえよう。

その他の額のうち、一斛五斗の二例は同一の「丘」(木氏丘)に居住していることから、「丘」ごとに貸与額が異

なっていた可能性もある。

また、「貸」禾の場合も「取」禾の場合も概ね一戸一斛と記録されていることから、基本的に貸与額と返還額は同一となり、利息を必要としなかった可能性が高い。

四、財政収支における貸米の位置づけ

以上、三節にわたり、穀物の貸与についてみてきた。最後に、簡潔ではあるがこれら貸与に関わる穀物収支は地方財政中にどのように扱われたのかを確認しておきたい。⁽²³⁾

まず、第一節でみたように、受納記録簿の表題簡によると、「貸食」米返還記録は、その他の受納記録とは別の簿としてまとめられていた。すなわち、新規の収入とは区別して扱われていたことが分かる。

また上記の他、貸与に関わる穀物については次の諸簡を見出せる。

【資料⑥】「貸米」・「貸食」に関する記録

- | | | |
|---|------------------------|--------|
| 1 | 入四年貸食嘉禾三年税粢米十七斛 | 3-1846 |
| 2 | 入四年貸食嘉禾三年火種租米五斗 | 3-1858 |
| 3 | 其卅七斛四斗爲黃龍三年貧民所貸米 | 1-9549 |
| 4 | 其五斛爲黃龍三年貧民所貸米 | 1-9603 |
| 5 | 其十五斛五斗嘉禾元年民還貸食付倉吏黃諱潘慮受 | |

長沙走馬樓吳簡にみえる「貸米」と「種糧」

1-3181

- 6 其卅一斛二斗嘉禾元年民貸食付倉吏黃諱番慮 中

1-9560

- 7 小武陵鄉 貧民貸食今餘禾所付 (正面)

小武陵鄉 守録人名本簿 (背面) (簽牌 J22 - 2620)

7の簽牌については、既公表の竹簡中には対応するものは見出せず、具体的な内容は明らかでないが、貸食者の名簿が郷によって作成され、県に提出されていたことが分かる。1・2は【資料①】【資料②】で挙げた納入記録とは異なり、「月旦簿」など収支報告中の受納部分に関わる二次的な記録である。ここでも、返還された穀物であることが明記されている。3・6は、集計記録などの後に、その内訳を示すものとして置かれる記録である。こうした書式に対応するものとして、次の二簡などが確認できる。

【資料⑥】

- | | | |
|---|-----------------|--------|
| 8 | 其九十斛正領 中 | 1-9551 |
| 9 | 其廿九斛正領付倉吏黃諱番慮 中 | 1-9672 |

3・4と8、5・6と9は書き出しの位置など簡の形態が同一かつ書式も類似し、また簡番号も近いことから、同性格の簿の構成要素と考えられる。そして両者の比較から、

「貧民所貸」や「民（還）貸食」と「正領」とが対応すると想定される。「領」はここでは「倉の管轄下にある（穀物）」を意味しており、「正領」とは「正式な収入（として倉に集積される穀物）」、すなわち賦税などとして納められた穀物の意と解される。「正領」に対する「貸米」という位置づけはまた、「貸米」とその他の収入が厳密に区別されていたことを示していると言えよう。

【資料②】の「貸食」米の納入記録では、貸与された穀物が、元々「どの年度」の「どの名目」のものであるかが明記されていた。以上に見てきた帳簿上の状況は、「貸米」とは一度穀倉に納められたものを民に貸し出すものであるため、返還（納入）された際に、二重の収入にならぬよう、帳簿上で厳密に区別して管理したことを体現しているのである。

おわりに

本稿では、走馬楼呉簡中の穀物貸与に関する諸記録・簿を分析し、それぞれの具体的状況を明らかにすることにつとめた。その大要を列記すると以下のようになる。

①官倉からの穀物の貸与としては、消費目的の「貸食」と生産目的の「種糧」があり、また現時点ではまだ性格を

確定できないが、（恐らく生産目的の）「禾」の貸与も行われていた。

②いずれも「支給」ではなく、返還を求められる貸与であった。

③これらの貸与業務は、郷を介して行われた。また「種糧」については、郡太守の指示で行われた。

④個別の貸与額は大きくないが、例えば一郷中で二〇〇、五〇〇戸前後と、広範に行われた可能性がある。

⑤返還された穀物は、財政収支の帳簿上において、他の収入とは別に記録され、管理された。

資料の偏りから、貸与の場面における手続きなど明らかにできない部分は多いが、データを総合的に分析することにより、基礎的な状況についてはある程度うかがえたと考える。

最後に、後の時代における穀物貸与業務との比較を行い、展望としたい。復旧唐開元令・雜令一八条に

一八〔開二五〕諸以粟麦出舉、還爲粟麦者、任依私契。官不爲理。仍以一年爲斷。不得因舊本、更令生利、又不得廻利爲本。

とあり、また、唐令を継承したとされる北宋天聖令・雜令二五条にも

諸以粟麦出舉、還爲粟麦者、任依私契。官不爲理。仍

以一年爲斷。不得因舊本生利、又不得廻利爲本。

とはば同文が確認されるように、唐代では穀物を貸与する「出舉」の制度が行われた。その具体的状況をうかがうことのできる資料として、大英博物館所蔵スタイン将来吐魯番文書「唐西州高昌県粟出舉帳断簡」がある。この文書は、八世紀の唐・西州高昌県において州倉倉督の管理のもと、民衆に粟を支給ないし貸与した記録（帳簿の断簡群）であり、受領者や里長の署名などが確認できる。大津透氏は本文書を検討し、唐代において国家が春に播種用の穀物を出挙することは一般的業務であり、徴税などとともに里正・郷の役割が大きかったと指摘する。⁽²⁵⁾ 走馬楼呉簡中においても、穀物貸与が一般的に行われており、かつ郷が一定の役割を担っていたことは、本稿中で確認したとおりである。

また、唐代以前における中国の史料中には明確には確認できないが、古代日本においては、春と夏の二季に公出挙が行われた。このうち、春の出挙は種稲の分与に関わると考えられ、夏の出挙は農繁期における労働力の維持を目的とした食糧支給の意味を持っていたと考えられている。⁽²⁶⁾ さらに、二〇〇八年に韓国扶余で出土した百濟「佐官貸食記」木簡には、「六月」に「貸食」が行われたことが記されており、百濟においても食料支給としての夏出挙が行われていた可能性が指摘されている。⁽²⁷⁾ 本稿で検討したように、走

馬楼呉簡中に、食糧としての「貸食」とタネモミとしての「種糧」の二種の穀物貸与が確認できることは、これらの淵源の具体的実例と言えよう。

本論では資料の不足により詳しい検討を加えることができなかったが、前後の時代における穀物貸与制度との比較を行う際の大きな問題として、貸与された穀物に対する利息の問題がある。唐代では、前述のように春に一般民に対して州倉から種子等として穀物を貸し出し、秋に利息を付けて返納させることが地方行政の一環として組み込まれていた。また、『漢書』中にも、錢の例であるが、民に貸し出して一定の利息を納めさせたとする記事がある。⁽²⁸⁾ 呉簡中にも「息」として穀物を納める記録はあるが、事例が少なく、また断簡であるため、具体的な部分は不明である。第一節でみた「貸食米」返還の記録中に既に利息額が含まれているのか、また、「貸食」と「種糧」では利息の面で違いがあるのか、など、財政中における貸与業務の位置付けと併せ、今後も検討を進めてゆきたい。

註

- (1) 既公表の簡牘中には、後漢の中平二年（一八五）から孫呉の嘉禾六年（二三七）までの紀年が見えるが、文書の作成年代は孫呉の黄龍年間（二二九―二三一）・嘉禾年間

(二三二)に集中する。現在までに(二〇〇九年一月)「嘉禾吏民田家煎」と題される大型木簡二四一枚(以下「田家煎」と、竹簡二八〇五〇枚が図録本において公表されている。既刊の図録本は次の四書。①長沙市文物考古研究所・中国文物研究所・北京大学歴史学系、走馬楼簡牘整理組編『長沙走馬楼三国呉簡・嘉禾吏民田家煎』(文物出版社、一九九九年九月)、②同『長沙走馬楼三国呉簡・竹簡〔志〕』(二〇〇三年一〇月)、③長沙簡牘博物館・中国文物研究所・北京大学歴史学系、走馬楼簡牘整理組編『長沙走馬楼三国呉簡・竹簡〔式〕』(二〇〇七年一月)、④同『長沙走馬楼三国呉簡・竹簡〔參〕』(二〇〇八年一月)。以下の釈文や簡牘番号はこの四書に依った。ただし②③④は簡番号が通しになっておらず、各々が1から始まるため、本稿中では(1-1234)・(2-1234)・(3-1234)などと巻数を表記した。

(2) 拙稿①「長沙走馬楼呉簡よりみる孫呉政権の穀物搬出システム」(『中国出土資料研究』第一〇号、二〇〇六年三月)以下、拙稿a。②「長沙走馬楼呉簡における穀倉関係簿初探」(『民衆史研究』第七二号、二〇〇六年十一月)以下、拙稿b。③「長沙走馬楼呉簡にみえる穀物財政システム」(工藤元男・李成市編『東アジア出土文字資料の研究』、雄山閣、二〇〇九年三月)以下、拙稿d。

拙稿の他、倉庫の制度に関する先行研究として、伊藤敏雄「長沙走馬楼簡牘中の邸閣・州中倉・三州倉について」(『九州大学東洋史論集』第三一号、二〇〇三年四月)、同

「長沙走馬楼呉簡中の「邸閣」再検討―米納入簡の書式と併せて」(『中国前近代史論集』、二〇〇七年二月)、中村威也「獣皮納入簡から見た長沙の環境」(『長沙呉簡研究報告』第二集)、窪添慶文「走馬楼呉簡の庫吏関係簡について」(『長沙走馬楼出土呉簡に関する比較史料学的研究とそのデータベース化』(平成一六年度～平成一八年度科学研究費補助金(基盤研究(B)16320096)研究成果報告書)、新潟大学、二〇〇七年三月)等がある。

(3) 拙稿「長沙走馬楼呉簡にみえる「限米」―孫呉政権の財政に関する一考察」(『三国志研究』第三号、二〇〇八年九月)以下、拙稿c。

(4) 湖北省江陵鳳凰山一〇号漢墓より出土した簡牘のうち「鄭里廩簿」と題される竹簡簿は、前漢初期における具体的な穀物貸与の資料である。表題を含めて二六簡よりなる全文のうち、最初の五簡を提示する。

- 1 鄭里廩簿 凡六十一石七斗
- 2 戸人聖能田一人口一人 田八畝 口移越人戸 〓
〓貸八斗二年四月乙
- 3 戸人 能田一人人口三人 田十畝 十口 貸一石
- 4 戸人穀牛能田二人口四人 田十二畝 十口 〓
〓貸一石二斗
- 5 戸人野能田四人口八人 田十五畝 十口 貸〓
〓一石五斗

竹簡の並び及び釈文は、裘錫圭「湖北江陵鳳凰山十号漢墓出土簡牘考釈」(『文物』一九七四年第七期)に依った。

本文書の性格について弘一氏は、官が農民に種子を貸した帳簿とする（弘一「江陵鳳凰山十号漢墓簡牘初探」『文物』一九七四年第六期）。

また、第一節で扱う「貸食」については、敦煌漢簡中(T5:224)に

官 告誅虜守候史哀次當候虜井上記到莊詣官候重事母以它病爲解有

教

(正面)

(背面)

とある。この他、敦煌漢簡・居延漢簡には「貸穀」などの穀物貸与に関する表現が見えるが、具体的な状況は不明である。

(5) 拙稿c。以下に挙げたものの他、「加減米」・「臨居米」・「漬米」・「八億錢米」・「舊米」・「搗米」・「歲錢米」などの語もみえるが、現時点では性格づける史料に乏しく、今後の検討課題である。

(6) 「折成米」については王子今「走馬樓簡『折成米』釈義」(『國際簡牘学会会刊』第三号、(台)蘭台出版社、二〇〇一年)・侯旭東「吳簡所見『折成米』補釈——兼論倉米的轉運与吏的職務行為過失補償」(『吳簡研究』第二輯、崇文書局、二〇〇六年九月)を参照。

(7) 当該の記録の性格・記載事項については、關尾史郎「吏民田家蒔の性格と機能に関する一試論」(長沙吳簡研究会『嘉禾吏民田家蒔研究——長沙吳簡研究報告』第一集、二〇〇一年七月)・前掲註(2)伊藤氏論文などを参照。このうち「邸閣」は、吳簡中では穀物の納入や移送などの場面

長沙走馬樓吳簡にみえる「貸米」と「種糧」

で監査的な役割を担う官である。

(8) 簿の構成については、侯旭東「長沙三国吳簡三州倉吏入米簿復原的初步研究」(『吳簡研究』第二輯所収)・拙稿bを参照。まず各郷ごとにまとめられ、さらに「諸郷」でまとめられる。「集凡」ではじまる簡は、最終的な集計の記録である。

(9) これらの記録については、拙稿b・dで言及したことがあるが、その後関連資料が増加していることから、改めて確認したい。また、本記録については、魏斌氏による体系的な検討(「走馬樓所出孫吳貸食簡初探」『魏晉南北朝隋唐史資料』第二三輯、二〇〇六年十二月)、中林隆之氏による帳簿面での網羅的な検討(「『貸米』・『貸食米』簡をめぐる予備的考察」『長沙吳簡研究報告』二〇〇八年特刊)二〇〇九年三月)がある。これらも参照されたい。

(10) 魏斌氏が指摘するように、既公表の「貸食」米納入に関する記録はみな「三州倉」への納入記録である。魏斌氏はこのことから、郷および吏民と直接関わるのは専ら三州倉のみであり、もう一つの倉である州中倉は三州倉からの穀物の転運先と見る(「田家蒔」において賦税の納入先として州中倉の吏が見えることについては、州中倉吏が三州倉の搬入業務を手伝ったためとする)。ただし、新たに公表された資料中には賦税を直接州中倉へ納入する記録も見いだせ、州中倉も吏民と直接関わる事が確認された。吏民への「貸食」についても賦税納入と同様、三州倉・州中倉がともに携わったと考えたい。

- (11) 一点のみであるが、「入樂郷嘉禾二年所貸食黄龍三年税米一百一十一斛五斗青畢」嘉禾二年三月廿二日下□丘□□」(1-5238)と、百斛以上を返還した記録が確認できる。ただし、後半部分が断絶しており納入の主体は不明である。

- (12) 高村武幸「長沙走馬樓呉簡に見える郷」(『長沙呉簡研究報告』第二集、二〇〇四年)。

- (13) 当該部分の积文は「貸直(?)息米」であり「直」字に疑問符を付しているが、図版を確認すると「食」字のように見える。他簡の「食」と积読されている文字と比較すると字形が同じであるため、本稿では「貸食息米」と読み替えた。

- (14) 积文は「倉教」とするが、図版を確認すると、他簡と同様「君教」と読める。

- (15) はぼ完形と思しき【資料③】1は長さ二二・〇センチ、幅三・三・二センチ。簡の中央に複数の縦割れが走っており、背面をみると、竹の丸い面を無理矢理平らにしようとして出来た縦割れであることが分かる。2-6871、2-6921、3-2056はそれぞれ同形式の簡が左右に縦割れした片側であり、2-257と同様の理由から破損したと考えられる。また、整理組が指摘するように、2-6871(左)と2-6921(右)は同一簡の片割れであり、両者は接合できる。各簡には上端から約三分の一、三分の二の辺りに浅い切り込みが入り、上中下の三段に分けて記述されている如くである。これらの簡については、二〇〇九年一月における調査(科学研究費補助金・基盤研究(A)「出土資料群のデータベース化とそ

れを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」プロジェクト(課題番号20242019 研究代表者 關尾史郎)にて実見することができた。拙稿「穀物搬出記録とその周辺」(『長沙呉簡研究報告二〇〇八年度特刊』所収)参照。

- (16) 走馬樓呉簡中には「府君」の他、「嘉禾三年十一月辛巳朔日□臨湘侯相君丞叩頭死罪敢言之」(1-6919)などと「臨湘侯国」に関連する形でも「君」が確認できる。ただし、「教」は上級官府からの下行文書であり(汪桂海『漢代官文書制度』広西教育出版社、一九九九年九月、四九〜五一頁)、『漢書』卷七六・王尊伝に「(安定太守王尊)出教告屬縣」、「出教敕掾・功曹」などとあるように文献史料の「教」の用例は太守が属県や属吏に下した文書であること、本文中に提示したように走馬樓呉簡中に「府君教」の用例があることから、ここでの「君」は太守であると考えられる。

- (17) この他、「丞」以下はみな官名であり、「丞」・「出給民種糧掾の丞潘・如曹」・「期會掾の丞某」・「録事掾の谷水」が校閲したことを示す可能性もあるが、ここでは本文で提示したように解しておく。

- (18) 「糧」字には「食糧」の意味もあり、「種糧」はタネモミと食糧を合わせた語である可能性も生ずる。ただし上記の用例から、本稿では、呉簡中における「種糧」はタネモミを意味すると解しておく。

- (19) 例えば「入屯田司馬黄升黄龍二年限米卅四斛」(1-3159)、「右諸郷入屯田司馬黄松限米一百五十五斛」(2-148)など

とある。

- (20) 「葦」字は「田家荊」の表題に「荊」字の異体字として用いられており、本簡でも同様と考えられる。ただし、その本文に相当すると考えられる【資料⑤】の各簡などには、同文を示す符号は確認できず、「荊」としての機能を有していたかは断定できない。

- (21) これらの他、「貸禾」について次の集計記録が確認できる。

・右夫里領貧民十八人貸食官禾合十八斛□□ 29036
本簡は他の集計記録と明らかに書式が異なり、別の簿の一部である可能性もある。特筆すべきは、郷もしくは「丘」単位の集計ではなく、里の集計であることである。この簡がもし【資料⑤】に提示した簡末に「居在某丘」とある「貸禾」簿の集計簡であるとするならば、「里」と「丘」との関係に新たな側面を示す新資料となる。すなわち、従来は、「里」と「丘」はともに郷の下に位置する行政区画とされてきたが、本記録により、「里」の下に「丘」が位置する可能性が生ずることになる。ただし、そうするとこれらの「禾」は「貸食」として貸与されたことになる。

- (22) 侯旭東「長沙走馬樓吳簡《竹簡》「式」吏民人名年紀口食簿」復原的初步研究」(『中華文史論叢』二〇〇九年第一期)にも指摘がある。各記録と「田家荊」の簡番号は以下のとおり。

① 丞碩…2-9024 5・128/5・205 ② 李息…2-9065/3-6296 4・466/5・108 ③ 鄭觀…3-21 5・234 ④ 黄柱…3-38 4・377

長沙走馬樓吳簡にみえる「貸米」と「種糧」

⑤ 潘長…3-41 4・592 ⑥ 謝蘇…3-301 4・244/5・323 ⑦ 丞金…3-6301 5・571 ⑧ 黄赤…3-6343 4・478/5・891 ⑨ 張碩…3-6455 5・66 ⑩ 黄諱…3-6752 4・571/0・12 ⑪ 黄蘭…3-6888 5・213 ⑫ 丞贊…3-6890 5・309 ⑬ 丞學…3-6924 5・653 ⑭ 謝雙…3-7104 4・234/5・322

このうち、所属丘が共通するのは②李息のみであるが、⑦丞金(平安丘/莫丘)以外は当該部分が断簡である。

この他、「丞汝」も本記録と「田家荊」両者に見えるが、前者では大男、後者では大女であるため除外した。なお、上記の一五名を含め本記録中の人名は、名簿や賦税納入記録中にも見える。

- (23) この部分は、拙稿dで既に言及したことであるが、穀物貸与の問題と密接に関わるため、改めて検討した。

- (24) 仁井田陞『唐令拾遺』(東京大学出版会、一九三三年)、仁井田陞著 池田温編『唐令拾遺補』(東京大学出版会、一九九七年)。

- (25) 天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組『天一閣藏明鈔本天聖令校証 附唐令復原研究』(中華書局、二〇〇六年)。

- (26) 大津透「唐西州高昌県粟出挙帳断簡について」スタイン将来吐魯番文書管見」(皆川完一編『古代中世史科学研究』上、吉川弘文館、一九九八年一〇月。のち大津透『日唐律令制の財政構造』岩波書店、二〇〇六年二月に再録)。

- (27) 古代日本の出挙制については、多くの論考がある。本稿では、三上喜孝氏の一連の論考を参照した。三上喜孝「古

代地方社会の出挙運営と帳簿」(『民衆史研究』五八、一九九九年)、同「古代の出挙に関する二、三の考察」(『日本律令制の構造』吉川弘文館、二〇〇三年)、同「出挙・農業経営と地域社会」(『歴史学研究』七八一、二〇〇三年)、同「出挙の運用」(『文字と古代日本』流通と文字)吉川弘文館、二〇〇五年)、同「古代東アジア出挙制度試論」(『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、二〇〇九年)など。

(28) 「佐官貸食記」に関する情報については、早稲田大学文学研究科外国人研究員・鄭東俊氏よりご教授を頂いた。本木簡については、前掲注(27)三上氏「古代東アジア出挙制度試論」を参照した。

(29) 『漢書』卷二四・食貨志下に王莽期のこととして「民欲祭祀喪紀而無用者、錢府以所入工商之貢但除之、祭祀毋過旬日、喪紀無過三月。民或乏絶、欲貸以治産業者、均授之、除其費、計所得受息、無過歲什一」とある。

【付記一】本稿は、二〇〇九年一〇月一日に開かれた早稲田大学史学会二〇〇九年度大会における同名報告を加筆・修正したものである。

【付記二】本稿は、平成二〇年度～二一年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。